

7		昭		昭		年 月 日	略 歴	摘 要
		20		17				
8	8	5	5	4	10			
15	13	30	1	23	5	30	8	
<p>大賣付近において停戦。</p> <p>新京集結のため洮南出發。</p> <p>（洮南）</p> <p>指揮小隊</p> <p>放球小隊</p> <p>自動車小隊</p> <p>水素小隊</p>		<p>編成</p> <p>結。</p> <p>洮南において第二氣象連隊第七中隊の人員を基幹として独立気球第一中隊編成完</p>		<p>軍令陸甲第七・五号により編成下令</p> <p>新京において第二氣象連隊第七中隊として編成完結</p> <p>龍江省平安鎮に展開。爾後氣象觀測業務に従事</p> <p>移駐のため平安鎮出發。同日洮南着。同日機動第一旅団司令官の隷下に入る。</p> <p>軍令陸甲第七五号により編成改正下令</p>		<p>独立気球第一中隊略歴</p> <p>（第二氣象連隊第七中隊）</p> <p>通称号 徳第一三九九七部隊</p> <p>羽第八三九八部隊</p>		

0649

		以9	8 8
		降16	27 23
		逐次新京出発。黒河經由入「ソ」	主力は農安において「ソ」軍により武装解除。 新京に移動、建国大学に収容。
	部隊長		
	少佐 富岡治三郎		

0650

年		略	略		
月	日				
8	7			<p>軍令陸甲第一〇六号により編成下令。            新京敷島高等女学校において関東軍固定通信隊本部および第二航空固定通信隊            復帰の一部の人員を基幹として編成完結。            爾後司令部は新京に位置し内地（大本營）および全滿の軍骨幹通信業務に従事            関東軍通信隊の編成            関東軍通信隊司令部            材料廠            第一第三通信隊            電信第五七連隊            関東軍鳩育成所            関東軍軍犬育成所            開戦に伴ない司令部は南嶺に移動            新京の通信中枢を通化に移動のため材料廠長高原少佐以下八〇名、先発隊とし            て南嶺出發。</p>	
8	8				
14	9	5	10	略	略
				摘要	

関東軍通信隊司令部略歴

通称号 徳第三七六〇六部隊 満第七五八〇部隊

略 略

摘要

0651



昭 20		年 月 日	略 歴	摘 要
8	8			
10	9	5	10	
<p>                     関東軍第一通信隊略歴                      通称号 徳第三七六〇七部隊 満第七五八六部隊                 </p> <p>                     軍令陸甲第一〇六号により編成下令。                      新京において第一一固定通信隊及び第二航空固定通信隊復帰の一部を基幹とし編成完結。                      同日関東軍通信隊司令部の隸下に入らしめられ次の編成をもつて南満州に通信網を構成し軍骨幹通信を担当す。                      編成                 </p> <p>                     本部 { 通信所 (一二)                      送信所 (一) }                      本部南嶺に移動。                      同日における部隊の展開状況次の如し                      本部 南嶺                      通信所、新京、奉天、大連、遼陽、承德、撫順、錦县、鞍山、安東、通化、本溪湖、哈爾濱                      送信所、寛城子                      新京の中枢通化移動のため新京通信所の一部を通化に派遣。                 </p>				

0653

通信隊司令部の指揮を受けしむ。

停戦

停戦に伴い左の如く「ソ」軍により武装解除されたる後入「ソ」。

一、新京通信所（通化派遣中の人員は八月十九日復帰）及び寛城子送信所は新京主力に復帰し八月二十二日同地において武装解除されたる後十月二十二日新京出発、黒河経由入「ソ」

一、奉天通信所は八月二十日奉天において武装解除されたる後北陵に集結し十一月十九日入「ソ」

一、哈爾濱通信所は八月二十日遜家において武装解除されたる後海林に集結入「ソ」

一、安東通信所は八月二十日安東において武装解除され北陵に集結したる後入「ソ」

一、錦県通信所は八月二十日遼陽において武装解除され海城にて作業大隊に編入されたる後入「ソ」

一、大連、遼陽、撫順、承德の各通信所は夫々所在地高級指揮官の指揮下に入らしめられ行動を共にした。

部隊長

大佐 島 義

0654

昭 20		年 月 日		略 歴	摘 要			
8	7	8	10			軍令陸甲第一〇六号により編成下令 牡丹江において第一二固定通信隊及び第二航空固定通信隊復帰の二部を基幹とし編成完結。 同日開東軍通信隊司令部の隷下に入らしめられ左の編成をもつて牡丹江方面の骨幹通信を担任す。 本部 約三〇〇名 勸務中隊 八〇名 通信所 六五〇名 部隊の開戦時における配置の状況次の如し本部及び勸務中隊 牡丹江 通信所 牡丹江、西牡丹江、琿春、平陽、城子溝、東安、掖河、佳木斯、間島、綏陽、敦化 開戦と共に第二通信隊は第一方面軍の指揮下に入らしめられ、方面軍司令部の敦化移駐に伴い本部は牡丹江出發敦化に向う。 本部は敦化着。 同日琿春、東安、綏陽、城子溝、平陽の各通信所を撤収敦化に集結せしめ、そ	6	8

関東軍第二通信隊略歴

通称号 徳第三七六〇八部隊 満第七五八三部隊

0655

	8
	15
<p>部隊長 大佐 松原作治</p>	<p>の人員をもつて教化通信所を開設し関東軍司令部及び第一方面軍隷下部隊との通信連絡に従事。</p> <p>同日牡丹江、西牡丹江、掖河の各通信所（約八〇名）を哈示浜に集結せしめ第三通信隊の指揮下に入らしむ。</p> <p>停戦</p> <p>停戦に伴い次の如く「ソ」軍により武装解除されたる後入「ソ」</p> <p>一 本部及び琿春・城子溝・平陽・東安の各通信所は八月二十二日教化において武装解除されたる後自九月二十七日至十一月三十日教化出発、綏芬河經由入「ソ」。</p> <p>二 牡丹江受信所、勳務中隊及び牡丹江、西牡丹江、掖河の各通信所は八月二十一日孫家において武装解除されたる後綏芬河經由入「ソ」す。</p> <p>三 佳木斯及び間島通信所は所在地高級指揮官の指揮下に入らしめられ行動を共にした。</p>

0656



昭 20		年 月 日	略 歴	摘 要
8	7			
15	11			
昭 20	昭 20	昭 20	昭 20	昭 20
8	7	8	7	8
15	11	5	10	15
<p>軍令陸甲第一〇六号により編成下令。 齊々哈爾において第二三固定通信隊及び第一四固定通信隊の一部ならびに第二航空固定通信隊復帰の一部人員をもつて編成完結。 本部、通信所、作業隊</p> <p>同日関東軍通信隊司令部の隷下に入らしめられ本部は齊々哈爾に位置し、作業隊を通信に派遣、通信所を左の如く配置し北滿地区における骨幹通信を担任。 通信所 齊々哈爾、海拉爾、鄭家屯、孫具、五叉溝、阿爾山、北安</p> <p>開戦と共に第四軍司令部の哈爾濱移動に伴い主力は哈爾濱に移動第一通信隊哈爾濱通信所及び第二通信隊牡丹江、西牡丹江及び掖河通信所と合流指揮下に入らしむ。</p> <p>(九日孫具及び海拉爾通信所の一部は交戦)</p> <p>停戦</p> <p>停戦に伴い左の如く「ソ」軍により武装解除されたる後入「ソ」</p> <p>主力は八月十九日哈爾濱郊外孫家において武装解除され海林収容所に収容さ</p>				

関東軍第三通信隊略歴

通称号 徳第三七六〇九部隊

満第七五八三部隊  
満第七五八四部隊

0657

れたる後黒河經由入「ソ」。

一、海拉爾通信所は齊々哈示通信所と合流八月二十日旧第四軍司令部宿舍において武装解除されたる後滿州里經由入「ソ」す。

一、孫呉通信所は第一二三師団の指揮下に入らしめられ八月十八日北孫呉において武装解除されたる後九月十三日同地出発黒河經由入「ソ」。

一、通化派遣の作業隊及び新京派遣の下士官、兵は夫々所在地高級指揮官の指揮下に入らしめられ行動を共にした。

部隊長

中佐 渡辺利興



て武装解除され海林に収容されたる後入「ソ」す。

一、佳木斯支部は開戦とともに逐次依蘭に後退八月十八日同地において武装解除されたる後入「ソ」す。

一、方正分遣所は八月十八日同地において武装解除されたる後入「ソ」す。

一、通化支部は八月十八日同地において武装解除されたる後入「ソ」す。

一、勤務第三中隊は吉林において八月二十五日、勤務第二中隊は安東において九月二日、勤務第四中隊は「ハルビン」本部と合流同地において九月二日夫々武装解除されたる後入「ソ」す。

部隊長

大佐 高橋卓三

昭和		年月日	略歴	摘要
19	11			
	5	10	関総参編第九二六号により鉄嶺において軍隊区分により編時建築勤務第一中隊編成完結。 軍令陸甲第七五号により編成下令。 鉄嶺において左記の如く編成完結、建築勤務第八一中隊と改称す。 本部 約 三〇名 第一小隊 約一五〇名 第二小隊 約一五〇名 第三小隊 約二二〇名 第二、三小隊を四平省東豊飛行場兵舎建築のため派遣。 第一小隊を奉天省大石橋飛行場兵舎建築のため派遣。 本部は鉄嶺、第一小隊は大石橋飛行場、第二、三小隊は東豊飛行場において停戦。 停戦に伴ない次の如く「ソ」軍により武装解除されたる後入「ソ」す。 一本部は八月二十鉄嶺において武装解除後一部を除き二十年九月十四日四平出	
	8	15		
	7	29		
	6	27		

関東軍建築勤務第八一中隊略歴

(臨時建築勤務第一中隊)

通称号 徳第一三九九六部隊

0661

発、黒河經由入「ソ」。

一、第一小隊は八月十九日大石橋出發本部と合流鉄嶺において武装解除されたる  
後入「ソ」。

一、第二小隊主力は撫順において武装解除一部は四平において武装解除されたる  
後黒河經由入「ソ」。

一、第三小隊は八月十五日日本部に合流すべく鉄嶺に向う途中四平において武装解  
除されたる後九月十四日四平出發黒河經由入「ソ」。

部隊長

中尉 桜井尚雄

0662

		自昭		至昭		昭		年 月 日	略 歴
		14 14		15 14		12			
		7 9 7		3 7 3		8			
		14	13	25	24	10	16	29	30
		<p>龍江省齊々哈爾において編成完結。 爾後次の編成をもつて各種兵器、器材、車輛に対する耐寒、耐熱、試験及び電離層等の研究業務に従事。</p> <p>第一班 庶務</p> <p>第二班 砲兵及び歩兵関係兵器</p> <p>本部 第三班 車輛</p> <p>第四班 工兵器材</p> <p>第五班 無線通信、電離層関係</p> <p>一部「ノモハン」事件参加。</p> <p>軍令陸甲第一四号により編成改正完結。</p> <p>第五班（研究所）を齊々哈爾に残置し主力は移駐のため齊々哈爾出發。</p> <p>新京着。</p> <p>部隊主力新京出發。</p> <p>吉林着</p>							
		<p>摘要</p>							

関東軍技術部略歴

通象号 徳第二五二九五部隊 満第六三部隊

0663





関東軍測量部略歴 (関東軍測量隊)											
通称号 徳第一三九四九部隊 満第四三九部隊											
年	月	日	略歴								摘要
昭	9	4	4	4	4	4	4	4	4	4	参謀本部陸地測量部において関東軍測量隊を編成。
		1	20	23	25	28					大阪港出発。
											釜山上陸。
											鮮満国境安東通過。
											奉天省、爾後本部は奉天に位置し全満及び北支、蒙古、「チタ」地区等における測量業務に従事。
昭	15	7	7								軍令陸甲第一四号により編成改正完結。
昭	18	7	7								軍令陸甲第六九号により編成改正下令。
昭	19	11	11								編成改正完結。同日関東軍測量部と改称。
昭	20	4	4								移駐のため奉天出発。
		8	12								新京着。
		9	15								大田技師以下七〇名を札幌屯地区測量のため派遣。
											新京において開戦。
											開戦直後における部隊編成次の如し

0665

	8	8	8	8
	15	13	11	10
<p>金野少尉以下五〇名平壤に向け出発。          部隊長以下七六名は測量器材疎開のため平壤に向け出発。          同日中村中佐以下四五〇名をもつて関東軍野戦測量隊を編成関東軍司令部と共に通化に転進。          金野少尉以下平壤着。          停戦に伴い部隊は「ソ」軍により次の如く武装、          武装解除された後入「ソ」。          一部隊長以下七六名は南下途中四平において停戦。爾後第三九師団長の指揮下に入り八月二十日四平貨物廠において武装解除され、軍属を解散九月十二日</p>	<p>本 部          大佐 工藤岩次郎</p>	<p>測量隊          長大佐 山口甲子男</p>	<p>野戦測量隊          部隊長兼務</p>	<p>材料廠          長中佐 瀬川素雄</p>
			<p>三角班          地形班          製図班</p>	<p>基点中隊          情報中隊          地図中隊</p>
			<p>製図班          工場          兵器庶務</p>	

0666

同地出發黒河經由入「ソ」。

一、通化に転進した関東軍野戦測量隊の中村中佐以下は八月二十三日同地において武装解除され八月二十六日吉林収容所に入所した後小民屯に移動した後九月黒河經由入「ソ」。

一、新京残留の山口大佐以下約五〇〇名は八月十六日第一四八師団長の指揮下に入り八月十八日新京満映に移動、同所において武装解除され八月二十四日南嶺に移動した後九月七日同地出發黒河經由入「ソ」。

一、札蘭屯派遣中の大田技師以下七〇名は八月十五日齊々哈爾に移動八月二十日齊々哈爾兵器廠において武解された後満州里經由入「ソ」。

一、平壤着の金野少尉以下は八月十八日後發の軍層と合流同地において八月二十五日武装解除された後十一月一日將校は美勒洞軍属は三合里及び延吉収容所に入所。

部隊長

大佐 工藤 岩次郎

0667

年月日	至自
<p style="text-align: center;"><b>関東軍化学部略歴</b> (第四野戦化学部を含む) 通称号 徳第二五二三一部隊 満第五一六部隊</p> <p style="text-align: center;">略 歴</p>	<p style="text-align: center;">昭和 14 8 1</p> <p>関東軍化学部の前身である化学兵器班は昭和十二年八月関東軍技術部創設時、同部内第五班として発足し、爾後齊々哈爾において化学兵器の研究および平房、虎林、虎頭、孫吳、鞍山、本溪湖、撫順、吉林等全滿各地における各種兵器の実験業務に従事。</p> <p>軍令陸甲第一四号により齊々哈爾において関東軍技術部化学兵器班の人員を基幹として関東軍化学部編成完結。</p> <p>編成</p> <p style="text-align: center;">本部</p> <p style="text-align: center;">大佐 勝村福治郎</p> <p style="text-align: center;">第一班 (庶務)</p> <p style="text-align: center;">第二班 (兵器)</p> <p style="text-align: center;">第三班 (実験)</p> <p style="text-align: center;">第四班 (病理)</p> <p style="text-align: center;">第五班 (病理、防護)</p> <p style="text-align: center;">第六班 (気象)</p> <p>一部「ノモンハン」事件参加。</p>
摘要	

0668





部隊長

初代	大佐	勝村	福治郎
二代	大佐	小柳津	政雄
三代	大佐	宮本	清一
四代	少将	山崎	正隆
五代	少将	秋山	金正
六代	大佐	丹羽	利男

昭 20	昭 17	年 月 日	略 歴	摘要
1	11 11			
1	10 1			
<p style="text-align: center;">臨時編成下令。</p> <p>富拉爾基において迫撃第一連隊、瓦斯第三大隊および関東軍制毒教育隊の人員を基幹として編成完結。同日関東軍化学部長の隷下に入る。</p> <p>爾後本部および材料廠、第二大隊は富拉爾基に位置し、第一大隊を齊々哈爾に分駐せしめ海拉爾、札蘭屯、大興安嶺、林口、鞍山、吉林等全滿各地における各種兵器の試験業務ならびに全滿制毒部隊要員の教育に従事。</p> <p>現在の編成次のとおり</p> <div style="display: flex; justify-content: space-between;"> <div style="width: 45%;"> <p>本部（富拉爾基） 中佐 深山松男</p> <p>教育隊（富拉爾基） 長少佐 寺田富吉</p> <p>材料廠（富拉爾基） 長中尉 田村正平</p> </div> <div style="width: 45%;"> <p>第一大隊（齊々哈爾） 第一中隊 長少佐 備前 吉 第二中隊</p> <p>第二大隊（富拉爾基） 第三中隊 長少佐 青井礼一 第四中隊</p> </div> </div>				

関東軍化学部練習隊略歴

通象号 徳第二五二三二部隊  
満第五二六部隊

0672



11	10	8	8	8	8	8	8	8	8	8	7	6	2
4	1	24	23	15	12		20	18	16	15	12	9	16
<p>齊々哈爾分駐の第一大隊は本部に復帰。</p> <p>第一大隊および材料廠の一部を関東軍砲兵下士官候補者隊の教育援助のため阿城に派遣。</p> <p>寺田少佐部隊長代理となる。</p> <p>主力は開戦と共に富拉爾基鉄橋の警備および陣地構築に従事。</p> <p>材料廠の主力を碾子山駅附近の警備に派遣。</p> <p>主力は富拉爾基において停戦。</p> <p>昂々溪に部隊集結。</p> <p>同地日本人小学校において武装解除。</p> <p>齊々哈爾第一四九師団輜重隊兵舎に移動同日軍属を解散、爾后第一四九師団輜重隊と行動を共にした。</p> <p>「第一大隊および材料廠の一部の行動」</p> <p>臨時関東軍砲兵隊第五大隊に編成、同日阿城より哈爾濱に移動。</p> <p>哈爾濱において停戦。</p> <p>同地において武装解除。同日阿城に移動。</p> <p>阿城出發。</p> <p>玉泉、横道河子、海林を経て牡丹江着。</p> <p>牡丹江出發。綏芬河經由入ソソ</p> <p>部隊長</p> <p>代理 少佐 寺田富吉</p>													

0673

		昭 20	昭 19	昭 14	年 月 日	略 歴
8		8	7	5		
9		7	10	25	1	
<p> <b>関東軍第一特別警備隊無線深査隊略歴</b>            (関東憲兵無線探査隊)            (新京特設憲兵隊)            通称号 満第一三九八六部隊 満第八六部隊         </p> <p>           新京市募城子において新京特設憲兵隊を編成全満州の無線探査を担任す。            編成改編により関東憲兵無線探査隊と改称す。            軍令陸甲第一〇六号により編成改正下令。            関東軍第一特別警備隊無線探査隊と改称し編成完結。            同日関東憲兵隊司令部の隷下をはなれ第一特別警備隊長の隷下に入る。            配置の状況左の如し。         </p> <p> <b>本部及び教育隊</b> 新 京         </p> <p> <b>第一中隊</b> 派遣隊「ハルビン」、大連、奉天、            大尉 村井 博 分遣隊東奉天、安東         </p> <p> <b>第二中隊</b> 派遣隊牡丹江            大尉 官崎末男 分遣隊佳木斯、延吉         </p> <p> <b>第三中隊</b> 派遣隊「チチハル」            中尉 木村欣一 分遣隊海拉爾         </p> <p>           (本部各中隊および教育隊は同一建物内にあつた)            開戦に伴い本部及び各中隊は梅河口に向け転進。         </p>						
						摘 要

0674

	8	8
	15	13
<p>吉林經由梅河口着。 梅河口において停戦。</p> <p>停戦に伴い「ソ」軍により左記の如く武装解除されたる後入「ソ」す。</p> <p>「主力は八月十八日梅河口出發八月二十日奉天南満中学校に集結（分派遣中の人員は逐次合流）武装解除されたる後入「ソ」。</p> <p>「「チチハル」分遣隊及び海拉爾分遣隊は本部の位置に集結不可能となり最寄部隊（チチハル分遣隊は「チチハル」憲兵隊、海拉爾分遣隊は海拉爾憲兵隊）と共に武装解除されたる後入「ソ」す。</p> <p>「佳木斯分遣隊は本部の位置に集結の途中「ハルビン」において停戦同地において「ハルビン」憲兵隊と共に武装解除されたる後入「ソ」。</p> <p>「女子軍属及び家族護送の爲内田曹長以下五名は平壤へ向け南下せしめ男子軍属八名は別行動をとる。</p> <p>部隊長 憲大佐 松 永 光 次</p>		

0675

大 大 大 7 13 12	年 月 日	
4 3 12	略	略
<p>大正七年八月「シベリヤ」出兵時第一線部隊は純作戦以外に種々複雑な問題に直面した。これについては軍事外交機関を設け統一的に処理することの必要に迫られ早速之を設置することとなり特務機関という名称を用いる事となった。関東軍情報部の前身である哈爾濱特務機関は当時「ウラジオストック」の外八地点に特務機関の設立された以前既に対「ロ」情報収集のため中島少将を哈爾濱に派遣（中島機関）同少将の「ウラジオストック」派遣軍司令部転出に伴ない武藤少将荒木中佐を補佐官として駐在（武藤機関）、三代少将石坂善次郎、補佐官四天王中佐駐在時哈爾濱特務機関という名称となる。</p> <p>爾後大正十一年十月末「シベリヤ」撤兵に伴ない各地の特務機関も現地部隊の動きに従って逐次閉鎖し北滿における哈爾濱、黒河、満州里の三地点にのみ残される事となった。</p> <p>綏芬河、海林に特務機関設置。</p> <p>黒河特務機関閉鎖。</p> <p>黒河特務機関（横井少佐）再開、海拉爾に特務機関（寺田中佐）設置。</p>	<p>大正七年八月「シベリヤ」出兵時第一線部隊は純作戦以外に種々複雑な問題に直面した。これについては軍事外交機関を設け統一的に処理することの必要に迫られ早速之を設置することとなり特務機関という名称を用いる事となった。関東軍情報部の前身である哈爾濱特務機関は当時「ウラジオストック」の外八地点に特務機関の設立された以前既に対「ロ」情報収集のため中島少将を哈爾濱に派遣（中島機関）同少将の「ウラジオストック」派遣軍司令部転出に伴ない武藤少将荒木中佐を補佐官として駐在（武藤機関）、三代少将石坂善次郎、補佐官四天王中佐駐在時哈爾濱特務機関という名称となる。</p> <p>爾後大正十一年十月末「シベリヤ」撤兵に伴ない各地の特務機関も現地部隊の動きに従って逐次閉鎖し北滿における哈爾濱、黒河、満州里の三地点にのみ残される事となった。</p> <p>綏芬河、海林に特務機関設置。</p> <p>黒河特務機関閉鎖。</p> <p>黒河特務機関（横井少佐）再開、海拉爾に特務機関（寺田中佐）設置。</p>	<p>関東軍情報部略歴</p> <p>（特務機関、臨時航空隊、語学教育隊（露語）、教育隊、通信隊）</p> <p>通象号 徳第二五二四一部隊（満第三一六部隊 満第三四五部隊 満第三七七部隊）</p>
	略	摘要

0676

昭	昭	昭	昭	昭	昭	昭	昭
15	14	14	13	12	10	9	9
4	5	4	12	8	2	10	7
頃							
<p>密山（長野少佐）、奉天（貴志中将）、吉林（池田少将）、齊々哈爾（林少佐）に特務機関設置。</p> <p>「註」齊々哈爾特務機関は爾後在滿日本軍の兵備充実と共に自然閉鎖。</p> <p>富錦に特務機関（中井少佐）設置。</p> <p>大連に特務機関設置、奉天特務機関長土肥原少将兼務す。</p> <p>三河（山本少佐）、王爺廟（泉大尉）に特務機関開設</p> <p>「註」これ等の諸機関ならびに在来の特務機関はいづれも軍隊区分の臨時編成による関東軍司令官（第二課）直属のものであり謀報その他秘密戦業務については哈爾浜特務機関長之を指示す。</p> <p>白系部隊を編成。</p> <p>軍令陸甲第六七号により関東軍特務機関となり朝鮮軍管轄下にあつた間島地区特務機関を隷下に入れ延吉に特務機関を設置、富錦の特務機関は佳木斯に移動、富錦は佳木斯特務機関の分派機関、満州里特務機関及び三河特務機関は夫々海拉爾特務機関の分派機関となる。</p> <p>綏芬河特務機関は牡丹江、密山特務機関は東安に夫々移動、綏芬河は牡丹江、密山は東安の各々分派機関となる。</p> <p>戦場情報隊を編成「ノモンハン」事件参加</p> <p>特務機関を関東軍情報部と改称哈爾浜特務機関は情報部本部となり、大連、延吉、牡丹江、東安、佳木斯、黒河、海拉爾、王爺廟の各特務機関は夫々支部となり</p>							

0677

昭	昭	昭
16	16	15
7	7	12
31	16	
<p>阿巴憂に支部を設置。哈爾濱に露語教育隊（滿第三四五）を編成。 編成左の如し</p> <p>露語教育隊</p> <p>白系部隊</p> <p>牡丹江支部―分派機関、綏芬河、東寧</p> <p>奉天支部</p> <p>大連支部</p> <p>延吉支部―分派機関、琿春、春化、図們</p> <p>東安支部―分派機関、虎頭、饒河、鷄寧</p> <p>佳木斯支部―分派機関、富錦、撫遠</p> <p>黒河支部―分派機関、奇克</p> <p>海拉爾支部―分派機関、三河、滿州里</p> <p>王爺廟支部―分派機関、阿爾山</p> <p>阿巴憂支部―分派機関、「ノーナイ」「ラマクレ」「ダイラマ」</p> <p>王爺廟支部は地名改称に伴い興安支部と改称。</p> <p>臨時編成（甲）下令。</p> <p>編成完結。</p>		

0678



	8	7
	9	10
	<p>に第四軍)に夫々配属。 軍令陸甲第一〇六号により編成改正下令。 「註」八月十二日編成完結の予定をもつて編成に着手するも特別警備隊は未完 結のうちに開戦となる。 開戦時における部隊配置の状況左の如し。</p>	
<p>東安支部 大佐 市来政明</p> <p>佳木斯支部 中佐 河西太郎</p> <p>牡丹江支部 大佐 牧野正民</p> <p>大佐原田文夫</p> <p>一面波支部 大佐 牧野正民</p> <p>教育隊 (少佐村田武経)</p> <p>通信隊 (中尉梶河澄男)</p> <p>語学教育隊 (大尉佐藤久憲)</p> <p>第一中隊、第二中隊、実験中隊 (哈爾浜)</p> <p>分機 亮子嶺、青龍山</p> <p>分機 東寧、横道河子、梨樹鎮 綏芬河、穆稜</p> <p>分機 富錦、鳳翔、撫遠、仏山 又八気、依蘭、集賢鎮、 西大屯、富安、富華、鉄心</p> <p>分機 鶏寧、饒河、平陽鎮、虎 頭、半載河</p>	<p>哈爾浜・黒河</p>	

0680



<p>ハル浜 本部 少将 秋草 俊 一班 中佐 山下 務 二班 少佐 伊藤 弘 三班 大佐 前田瑞穂 四班 大尉 引地武志 五班主大尉 岩崎英一 六班医中尉 前川巖雄 保護院 少佐 飯島良雄</p>		<p>黒河支部 代大尉 田村康三 齊々ハル支部 中佐 田中義久 海拉爾支部 中佐 天野勇</p>		<p>興安支部 大佐 金川耕作 間島支部 中佐 吉岡安直 通化支部 中佐 後藤秀範 奉天支部 少将 熱海三郎 承德支部 中佐 斉藤鐘三 阿巴嘎支部 少佐 木村功一</p>		<p>分機 奇克、鷗浦、漠河、嫩江、北安、孫家、興安 分機 甘河、綏原、嫩江、札蘭屯、大揚樹 分機 「アムグロ」牙克石、札来諾爾、滿州里「キラムト」三河、「シユリカン」「アルタイメン」 分機 阿爾山「ハンダガヤ」白狼「イルセ」「デルゲン」北鎮山 分機 琿春、春化、図們、九沙坪 分機 大連 分機 赤峰 分機 林西、「ラマクレ」「ノ」「ナイ」「ダイラマ」</p>	
---	--	--	--	---	--	--	--

0681

昭	昭	昭
20	20	20
8 8	8	8 8 8
26 9	14	22 15 14 9
<p>開戦時よりの本部及び各支部の行動次の如し</p> <p>「哈爾濱本部」</p> <p>開戦と同時に江島少佐を長として松花江出張所を編成。</p> <p>一面波支部、教育隊、通信隊は本部に合流。</p> <p>哈爾濱において停戦。</p> <p>同日一面波支部、教育隊、通信隊、語学教育隊を集結、同日軍属を解散。</p> <p>哈爾濱飛行場において武装解除され、同日將校約三四名を除き下士官以下約二五〇名を篠原大尉指揮哈爾濱出發同日阿城着、爾後海林収容所に収容された後綏芬河經由入「ソ」</p> <p>哈爾濱に残留の將校は二十二日武装解除され八月二十五日以降「ソ」軍の取調べを受けた後三梯団に分かれ逐次入「ソ」</p> <p>「一面波支部」</p> <p>一面波出發、同日哈爾濱着、本部に合流</p> <p>「牡丹江支部」</p> <p>支部主力は梨樹鎮山中に転進中開戦となり逐次横道河子に向け後退開始。</p> <p>横道河子着、同日同地において武装解除。</p> <p>爾後拉古収容所に収容された後綏芬河經由入「ソ」</p>		

0682

昭 20			昭 20			
8	8	8	8	8	8	8
30	13	10	24	20	15	9
<p>主力横道河子に集結、武装解除され海林収容所次いで拉古収容所に収容された 後綏拉河経由入「ソ」</p> <p>後発の福田大尉以下は八月十七日横道河子着八月十八日同地において武装解除 され八月二十一日拉古収容所に収容された後入「ソ」</p>			<p>先発隊及び分機は敦化ならびに牡丹江において武装解除された後入「ソ」 「佳木斯支部」</p> <p>主力は開戦と同時に三江省方正に転進。 方正において停戦。 方正において武装解除。</p> <p>支部長「ソ」軍に拉致された後は独立混成第七十八旅団砲兵隊に合流行動を共 にす。</p> <p>富錦、富安、集賢鎮分機は開戦時富錦警備隊に合流。撫遠分機は撫遠警備隊に 合流。</p> <p>「東安支部」</p> <p>主力東安出發。</p> <p>浜綏線「ロマノフカ」付近において「ソ」軍砲撃を受けた後は分散し敦化に向 う。</p>			

0683

	昭		昭								昭
	20		20								20
8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8
10	9	18	15	22	20	17	15	11	9	8	
	同日より「ソ」軍と交戦。 満州里出張所主力に復帰。 結。	主力は独立歩兵第五八七大隊及び海拉爾憲兵隊の保安隊と合流一〇三陣地に集	興安嶺に転進準備統行中齊々哈爾において停戦、同日一部を解散。 同日において武装解除された後満州里經由入「ソ」	「海拉爾支部」	同日において停戦。	同日出発。	同日出発。	同日出発。	同日出発。	同日出発。	同日出発。

0684

昭 20									昭 20
8		10	8	8	8	8	8	8	8
1		14	24	22	21	15	13	11	18 17
<p>第二特別警備第二大隊編成下令、</p> <p>「間島支部」</p> <p>九月十一日白城子着同地において武装解除された後入「ソ」。</p> <p>阿爾山地区分機は八月九日開戦と同時に阿爾山に集結、八月十日同地出発本部との連絡不能となり独自行動し白狼「デルゲン」五叉溝を迂廻興安付近を経て</p> <p>同地出発、錦県次いで大石橋經由大連に移動「ソ」軍により個人調査された後入「ソ」</p> <p>鉄嶺着。</p> <p>同地出発。</p> <p>法庫に移動、同地において武装解除。</p> <p>西科後旗において停戦。</p> <p>鄭衆屯着、同日内蒙西科中旗に向け出発。</p> <p>主力興安出発。</p> <p>「興安支部」</p> <p>分機の一部は嫩江、一部は興安嶺山中において武装解除された後入「ソ」</p> <p>海拉爾において武装解除された後十一月満州里經由入「ソ」</p> <p>戦闘停戦。</p>									

0685

昭													
20													
8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8
30	20	18	15	13	12	9		18	17	15		13	9
<p>支部は各分派機関の増強を計ると共に特別警備隊編成予定の計画に基き行動開始。</p> <p>編成完結</p> <p>「註」問島支部は編成完結後も単独行動をとる。</p> <p>問島において停戦。</p> <p>支部長「ソ」軍に拉致される。</p> <p>主力は同地において武装解除され、各分機は所在地高級指揮官の指揮下に入り行動す。</p> <p>「通化支部」</p> <p>通化付近の戦闘配備につく。</p> <p>濛江に情報収集のため一部を派遣。</p> <p>哈爾浜本部通信隊より内田軍曹以下一〇名派遣され到着。</p> <p>通化において停戦。</p> <p>支部長外二名「ソ」軍に拉致される。</p> <p>通化において武装解除された後入「ソ」。</p> <p>濛江に派遣の一部主力に合流。</p>													

0686

昭 20		昭 20		昭 20	
8	8	9	8	8	8
15	9	15	19	15	9
<p>赤峯において停戦。</p> <p>日赤峯に向け出発。</p> <p>北支駐蒙軍より派遣中の警備一ケ小隊及び氣象観測班を指揮下に入れ主力は同</p>		<p>赤峯出張所は開戦時阿巴嘎支部に合流行動を共にす。</p> <p>「阿巴嘎支部」</p>		<p>「奉天支部」</p> <p>開戦と同時に支部は防衛軍司令部の指揮下に入る。</p> <p>奉天において停戦。</p> <p>軍属及び下士官以下を解散。</p> <p>奉天において武装解除され敦島寮地下室に收容された後満州里經由入「ソ」。</p> <p>大連出張所竹岡大尉以下は関東州戒嚴令施行に伴い旅順要塞司令部の指揮下に</p> <p>入。</p> <p>雇傭人及び自系を解散。</p> <p>大連出張所庁舎において武装解除され海城收容所に移動した後入「ソ」。</p> <p>「承德支部」</p> <p>承德において停戦。</p> <p>承德離宮内において武装解除。</p> <p>承德出発、満州里經由入「ソ」。</p>	

0687

	8	8	8
	30	21	16
<p>支部長以下若干名赤峯に残留約六十名同地出發錦県に向う。</p> <p>支部長錦県着、先発隊を掌握。</p> <p>錦県憲兵隊本部において武装解除され阜新、新京、南嶺と収容所を移動した後黒河由入「ソ」</p> <p>「註」全滿に広く支部を配置し各支部は又夫々数ヶ所に出張所及び連絡所を設け置いてあり、この為これ等の分派機關中には最後まで支部主力と連絡をとり得なかつたものが多い。</p> <p>部隊長 少将 秋草 俊</p>			

0688



昭		年 月 日	略  歴	摘 要
19	5			
6	16			
<p>同日関東軍通信情報部隊を隷下に入らしむると共に主として東満及び北満に            広く情報網を左記の如く展開し情報の収集業務に従事す。</p> <p>本 部            材 料 廠            解 説 隊            第一無線謀報隊            第二無線謀報隊            (第一、二中隊)</p> <p>新 京</p>			<p>関東軍特殊情報部            (関東軍特殊情報部)</p> <p>徳第二五二三部隊            徳第二九七三部隊</p> <p>満第一七六九八部隊            満第一八八八部隊</p> <p>満第二五八六七部隊            満第二八六七部隊</p> <p>満第一四八五七部隊            満第一九二七部隊</p>	
<p>関東軍参謀部第二課別班(秘匿名関東軍司令部研究部)として発足し昭和十六            年五月十五日関東軍特殊情報部と改称す。            十八年七月各所に出張所開設。            軍令陸甲第五五号により編成下令。            関東軍特殊情報部の人員を基幹とし新京において関東軍特殊情報隊を左の如            く編成完結。</p> <p>本 部            材 料 廠            解 説 隊            第一無線謀報隊            第二無線謀報隊            (第一、二中隊)</p>				

0689

第七無線謀報班	第八無線謀報班	第八無線謀報班の主力	解説隊の一部	教育隊	第一無線謀報班	第八無線謀報班の一部	解説隊の一部	第二無線謀報班	第八無線謀報班の一部	第二無線謀報班	第二無線謀報班の一部	解説隊の一部	第二無線謀報班	第八無線謀報班の一部	解説隊の一部	第四無線謀報班	第八無線謀報班の一部	解説隊の一部	第五無線謀報班	第八無線謀報班の一部	解説隊の一部	第五無線謀報班	第八無線謀報班の一部	解説隊の一部	第二無線謀報班	第二無線謀報班派遣隊
南嶺出張所	大尉 三宅 農夫男				康徳出張所	大尉 米谷 緑郎		掖河出張所	少佐 岡本 傑		佳木斯出張所	中尉 石田 晉		孫興出張所	少佐 山本 明		「ハルビン」出張所	大尉 永坂 三郎		海拉爾出張所	少佐 金田 善一					

0690



一 掖河出張所は横道河子において武装解除されたる後九月二十九日拉古出發綏芬河經由入「ソ」。

一 康徳出張所は八月十六日全員京城到着解散。

部隊長

少将 小松 己 三 雄

0692

<p>關東軍通信情報隊略歴 (關東軍通信情報部) 通称号 徳第二五二四部隊 満第一六四部隊</p>	<p>年 月 日</p>	<p>昭 14 19</p>
<p>略 歴</p>	<p>昭和14年7月5日</p>	<p>關東軍の命令により満州電信電話株式会社調査局(哈爾濱)を設置し「ソ」連電報(平文)の傍受業務に従事させた。(従事社員は無給嘱託) 軍令陸甲第五五号により編成下令。 前記社員を骨幹として關東軍通信情報部編成完結。同日關東軍特殊情報隊長の隷下に入り本部は哈爾濱に位置し支部および連絡所を次の如く配置し情報収集業務に従事。 編成</p>
<p>摘要</p>	<p></p>	<p>本部(哈爾濱)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>海拉爾支部</li> <li>顧郷屯支部</li> <li>佳木斯支部</li> <li>清津支部</li> <li>牡丹江支部</li> <li>大連支部</li> <li>齊々哈爾支部</li> <li>新京連絡所</li> <li>奉天支部</li> <li>承德支部</li> </ul>

0693

					昭
					20
					7
					8
					8
					12
					23
					18
					15
					5
					10
<p>軍令陸甲第一〇六号により編成改正下令。          関東軍通信情報部の軍属を骨幹とし上級将校を編入して編成改正完結、関東軍          通信情報隊と改称。          停戦。          同日本部に順郷屯支部の一部、佳木斯支部、海拉爾支部復帰、爾後関東軍特殊          情報隊哈爾濱支部に合流。          成高子において武装解除された後「ソ」軍通信隊長の指揮を受け通信労働隊を          編成し通信網の建設作業に従事。          哈爾濱出發満州里經由入「ソ」。          本部に復帰不能の支部は一部数ヶ月後強制収容された者のほかは一般邦人に混          入帰還。</p>					
<p>部隊長          少将 小松 己三雄          代理囑託 松尾 松太郎</p>					

0694

年 月 日										略 歴	摘 要
昭 14	昭 13			昭 12			昭 11				
6 6 3 12 8	3 12 8	6 12	6 12	22 20 11 12 5	13 12 8	14 5					
<p>           昭和十二年軍令陸甲第四号に基く第四次編成改正完結。            第五次編成完結。(哈爾浜)            昭和十二年軍令陸甲第四号に基く第六次編成改正完結。            昭和十二年軍令陸甲第四号により関東軍第二防疫給水班編成下令。            編成完結。(哈爾浜)         </p> <p>           昭和十二年軍令陸甲第三号及び同四号により満州駐屯陸軍部隊編成及び編成改正下令。            第二次編成改正完結。(哈爾浜)         </p> <p>           第二次編成改正完結。(哈爾浜)         </p> <p>           第三次編成改正完結。         </p> <p>           第二次編成改正完結。            第三次編成改正完結。            第二次編成改正完結。            編成改正完結。(哈爾浜)         </p> <p>           関東軍直轄部隊として部隊長以下全員軍医薬劑官及び衛生下士官兵をもつて編成し各部隊の防疫給水及細菌の研究予防等の業務に従事す。(昭二、一二、以前については省略)         </p>											
<p>           関東軍防疫給水部略歴            (関東軍防疫部)            通称号 徳第二五〇一、二五〇二、二五〇三、二五〇四、二五〇五、二五〇六、八七四七部隊            満第六五九、六四三、一六一、五四三、六七三、三一九部隊         </p>											

0695

昭 20	昭 15	自 6	至 10	昭 8	昭 8	昭 7	昭 12	昭 8	昭 10	昭 6
6	15	8	22	1	10	7	6	上	23	
<p>部長以下一部「ノモンハン」事件に参加。          陸満機密第四号により編成改正完結。          陸満機密第一四号により編成改正完結。          軍令陸甲第一四号により関東軍防疫部編成改正下令。          関東軍防疫給水部と称号変更。          「ハルビン」において編成改正完結。          左記の編成をもつて、細菌の研究を担当、各部隊の防疫給水、血清、痘症、予防ならびに練成隊において青少年の教育を実施す。          本部「ハルビン」 総務部、第一、二、三、四部              資材部 教育部（練成隊）              診療部          支部 牡丹江、孫吳、林口、大連、海拉爾。          関東軍命令により「ペスト」防疫隊を編成大連支部に編入せしむ。          開戦前における本部及び支部の配置の状況次の如し。          本部 「ハルビン」中將 石井 四郎 以下約二、三〇〇名          支部 海拉爾 少佐 加藤 恒則 約一六五名          支部 牡丹江 少佐 尾上 正男 約二〇〇名</p>										

0696



	8	8	8
	15	10	9
<p>孫 吳 中佐 西 俊 英 以下約一三六名</p> <p>林 口 少佐 榑 原 秀 夫 以下約二二四名</p> <p>大 連 技師 安 東 洪 次 以下約二五〇名</p> <p>本部は開戦と共に北朝鮮方面に移動すべく南下開始、孫吳支部は第一二三師団の北孫吳陣地に入る。</p> <p>同日、海拉爾支部は夕刻全員自動車にて開嶺に向つて出発、女子軍属は「チチハル」に避難せしめる。</p> <p>林口支部は二〇名を残置林口出発八月一三日七星に到着。</p> <p>牡丹江支部は掖河に前進し愛河の線にある部隊の防疫給水に任じ同日「ソ」軍の進出により拉古に後退次いで横道河子に後退す。</p> <p>停戦。</p> <p>停戦に伴ない「ソ」軍により左の如く武装解除されたる後入「ソ」(帰還)す。</p> <p>本部は新京付近を南下中停戦となりその儘南下し釜山より昭和二十年八月二十六日より九月五日にわたり仙崎、萩、米子にそれぞれ上陸復員、主力出発時「ハルビン」残留の人員は双城堡において「ソ」軍に収容されたる後入「ソ」</p> <p>大連支部は停戦後その儘「ソ」軍に利用され中国長春鉄道大連研究所と改称し勤務せしめられたる後一部は那人に混入一部は安東、「ハルビン」、北支、</p>			

0697

山東方面に移送せらる。

〔牡丹江支部は横道河子において（一部離隊者を除く）主力は拉古に移されたる後入「ソ」す。〕

〔孫呉支部主力は孫呉において武装解除されたる後入「ソ」。〕

〔海拉爾支部は八月十五日「ブハト」に移動八月十六日同地において武装解除され「チチハル」に移されたる後入「ソ」。〕

〔林口支部は南下中八月十四日「ソ」軍戦車の攻撃を受け分散一部は一面波及び東京城大部は横道河子において武装解除されたる後入「ソ」。〕

〔ベスト防疫隊は奉天において武装解除されたる後居留民会所属の病院を開設し二十一年八月国府軍の接収によりその大部は同年帰国す。〕

部長

中将 石井四郎

0698